



痛みのペンリウク 囚われのアイヌ 人骨

土橋芳美

草風館 2017年

民族的マイノリティーの 過去から現在に至る悲劇を語る。

アイヌは北海道の先住民で、独自の言語と文化と生活様式をもって
いた。しかし明治政府の同化政策により、それらを次第に奪われて
いく。そこには、民族的マイノリティーへの配慮の乏しさを見ることが
できる。その一例が、ある大学が貴重な人体標本として収集したアイ
ヌの人骨を返却していないという出来事である。子孫の一人である
著者はそのことから出発して、今は亡きペンリウクという人物の口
を借りるという形で、アイヌの過去から現在に至る悲劇を語る。短い
作品だが、叙事詩のように読者に語りかけてくる。

人種・民族

アイヌ



JR上野駅公園口 柳美里

河出書房新社 2014年

社会の周縁に追いやられる人々への 認識を新たにしてくれる一冊。

1950～60年代、日本が高度経済成長を謳歌した時代、その経済
成長を支える労働力として貢献したのが、地方の農村部から大都市
に働きに来た出稼ぎ労働者たちだった。この作品は、その時代に福
島県から東京に出稼ぎに来たシゲちゃんという男を主人公にして、上
野公園とその周辺を舞台にしながら、ホームレスたちの生活と心情
を描く。ホームレスになるのを、彼らだけの責任に帰すことはできな
い。経済や社会の構造、家族や地域共同体のつながりの薄さなど
も絡まる。ホームレスとして社会の周縁に追いやられる人々への認識
を新たにしてくれる小説である。日本にいる外国人労働者へのわれ
われの見方にも一石を投じてくれる。

貧困

路上生活者



苦海浄土 (全三部)

石牟礼道子

河出書房新社 2011年
池澤夏樹=個人編集『世界
文学全集』第3集

水俣病から新型コロナウイルス感染症まで、 病から生まれる人権課題を考える。

高度経済成長期の日本では、その代償のように各地で深刻な公害が発生した。そのうちのひとつが水俣病である。九州の水俣湾沿岸に住む人々のあいだに謎の病が広がり、さまざまな障害を引き起こした。工場の廃液に含まれる有機水銀が原因だったが、当初は理由が分からなかったため、患者たちは冷たい差別や偏見にさらされた。『苦海浄土』は、著者が患者たちに寄り添い、彼(女)らの言葉に耳を傾け、その思いと現実を独特の言葉で表現した日本文学の傑作であり、世界的にも評価が高い。ハンセン病、エイズ、そして現在の新型コロナウイルス感染症など、病とそれへの対策は、私たちが人権課題を考える好い機会になるだろう。

公害



絵本 星の王子さま サンテグジュペリ (池澤夏樹訳)

集英社 2006年

人間が「他者」と出会う意味、 共存するために何が必要なのかを問う。

世界中でもっとも読まれている本のひとつと言われる作品の絵本版。邦訳は数多くあるが、本作は原書の一部を割愛して絵本仕立てになっている。自分が生まれ育った星を離れ、いくつかの星で風変わりな人間たちに出会った後、星の王子さまは地球にたどり着き、小説の語り手である「ぼく」と出会う。この作品では、何か深刻な差別や人権問題が直接論じられているわけではないが、人間が「他者」と出会うとはどういう意味なのか、その他者を尊敬し、共存するためには何が必要なのかを問いかける。一見したところ童話の様相を呈しているが、愛、友情、共感、ケアの倫理などについて深く考えさせてくれる傑作である。

共生



慶應義塾大学教授

小倉孝誠 Kousei Ogura

1956年青森県生まれ。東京大学大学院博士課程中退。パリ第4大学文学博士。2003年から2021年まで、慶應義塾大学文学部教授。専攻はフランスの文学と文化史。身体、病理、ジェンダーなどの視点から、19世紀の文学、芸術、社会、思想を総合的に研究。近著に『歴史をどう語るか：近現代フランス』（法政大学出版局、2021年）など。